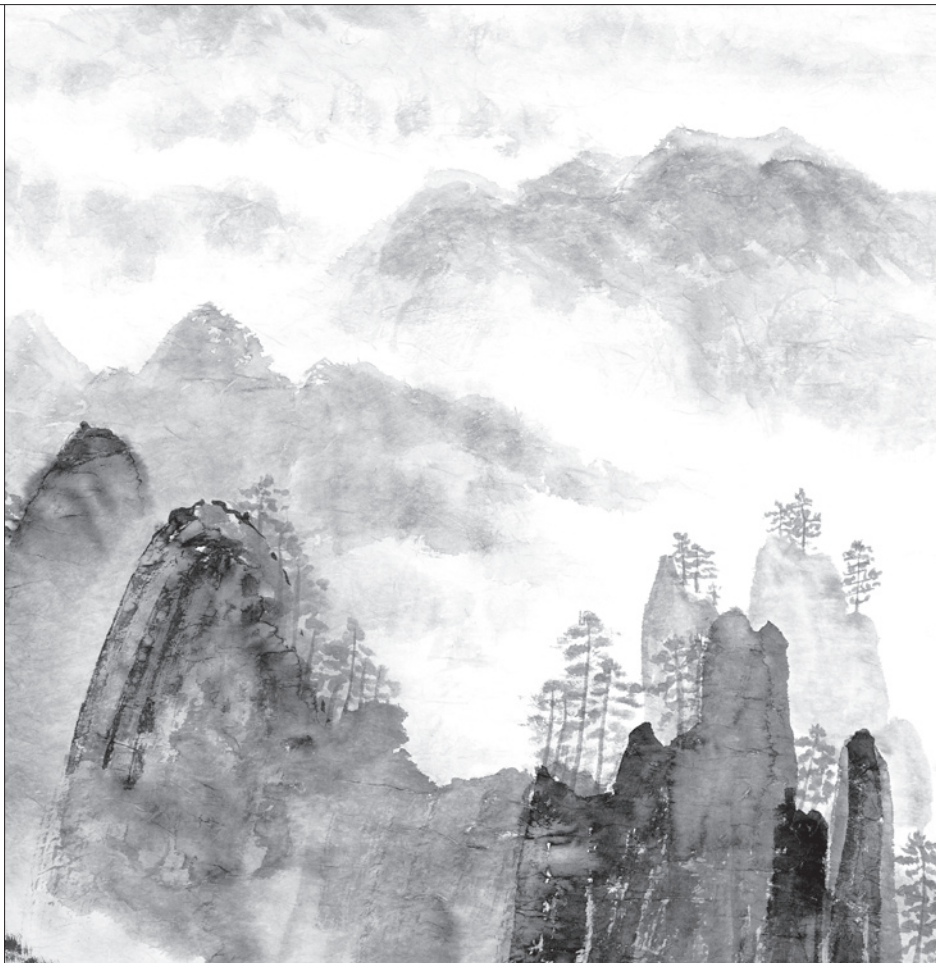


日本中國學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chūgoku Gakkai

二〇一五年(平成二十七年) 四月三〇日
第一號(通卷第二十七号)



●目録

巻頭言

〇二 理事長を拝命して

土田健次郎

〇四 儒学に関する

国際学術シンポジウムの開催状況

佐藤鍊太郎

〇六 和漢比較文学会第7回特別例会報告

堀 誠

〇八 中国近世語学会の沿革と近年の動向

―ワークショップ「官話音研究の資料と問題点」―

千葉 謙悟

一〇 国内学会消息(平成二十六年)

二二 平成二十七・二十八年年度各種委員会の構成

二三 委員会報告

二三 事務局より

二四 第67回大会開催のお知らせと
研究発表の募集

編集●早稲田大学文学部 岡崎由美

〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1

メールアドレス: okazakiy@vasoda.jp

発行●日本中國學會

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内

ファックス: 03-3251-4853

メールアドレス: info@nippon-chugoku-gakkai.org

理事長を拝命して

理事長
土田健次郎

二十一世紀を迎えた時、「アジア学を問いなおす」とか「人文知の可能性」とかいった類のシンポジウムがけっこう企画されたように記憶します。気がつけばそれから既に十五年近くもたってしまいました。その間、アジア学や人文学の状況が好転したようには見えません。シンポジウムで議論が拡散するのは、各種の新たな理論だの学説だのが妍を競っているからではなく、今後の展望を語ってもその有効性のリアリティーが感じられないからではないでしょうか。次第に老衰していく身体に何か効き目のあるトレーニング方法を模索していると言ったら言い過ぎでしょうか。このような状況の中における日本中国学会の意味とは会員にとって何なのかということが、今また問われている気がします。

私が師匠の楠山春樹元理事長から聞いた話によると、学会初期の頃、大会時の宿舎は旅館で、大部屋に大家から若手まで一緒に雑魚寝し、若い研究者にとってはそこで聞いた他大学の大家の話がたいへん刺激や励ましになったとのこと。戦後間もないという状況があったにしろ、学会自体も若かったのでしょう。なお学会創立の際に実務方面

の中心になった五人の「ボス」がおられたとのことですが、その方たちは最年長でも五十代だったそうです(座談会「草創期の日本中国學會」、『日本中国學會五十年史』掲載)。国立大学の定年が延びた今の状況とは違うとはいえ、やはり若々しさを感じることではあります。ちなみに私の師匠はその時の「ボス」のうちのお一人の助手をされておりました。

また学会で知遇を得た他大学の先生が就職の世話を焼いてくれることもあったとか。今は公募とか人事委員会とかいろいろあってそう簡単に事は進まず、また人事の公平性ということではどちらが良いかは問題でもありますが、少なくとも若手にとって学会に出るメリットは、当時はかなりあったのではないかと察せられます。私は師匠の命令で大学院生時代から大会の懇親会には出席しました。そこで師匠は私を他大学の先生たちに紹介してくれました。私としてはたいした実績も無いため面映ゆい限りでしたが。ただそれによって刺激を受け、世界が広がったのも事実です。

大学教員になってから学会の懇親会に出ているうちに感じるようになったのは、懇親会が大学の同窓会や旧知の間だけでの懇親の場のようになりがちなことでした。なじみ同士のグループでのみ懇親するのであれば、別に懇親会に出席する必要も無く、最初から知り合いで土地のうまい物でも食べに行った方がよいわけです。職場や会のつきあいを越えた学会という空間をもっと有効に機能させなければならぬのではないのでしょうか。

また創立当時に意識されていた学会のメリットの一つには、生々しい話ですが、科学研究費配分の問題がありました。その件は、学会創設を呼びかけた倉石武四郎氏の「日本中国学会はどうしてできたか」(『日本中国學會五十年史』附載)に書いてあります。今と仕組みが異なるのですが、以前は科学研究費の審査員選出の母胎に学会があったことなどから、そのためにも全国学会が求められたのです。

日本中国学会は、東も西も南も北も加入する文字通りの全国学会です。かつては中国史ではこのような学会はなく、結果的には全国の研究者が入っているにしろ、母胎は特定の大学とかイデオロギーとかでした。(今では状況は変わってきていますが)。科学研究費という即物的なものが原因の一つであったにしろ、創立時から本学会が名実と

もに全国規模であることは誇ってよいことだと思います。

中国と日本との関係は歴史的にも現実的にも密接で、それゆえ中国研究は政治状況などに左右されやすい傾向があります。六十五年の学会の歴史の中でも中国の状況に影響されたことが一再ならずありました。近年の日中関係の冷え込みも陰に陽に影響している感があります。ただ学問というものは現実を見据えながらも時流に流されてはならないもので、その姿勢があるからこそ、純粋に学問の蓄積に貢献するだけではなく、時代を見抜く視点を一般社会に提供することも可能なのです。会員はそれぞれの思想をお持ちでしょうが、学問についての真摯な議論と学者としての連帯感を維持できる場の提供こそが、学会に求められていることだと思っております。

現実問題として、学会は若手研究者が就職する場合の重要な業績作りの場という面を持っています。学会のその方面の機能は、公募が一般化してきた当今、ますます重要なものになっています。もっとも業績点数主義の傾向が見られるのはやはり弊害といってよいものですし、学会機関誌の質を落とすということもあってはなりません。ただ会員の発表と相互研鑽の機会の拡大に学会がどう寄与するかということは、これからますます模索していかなければならないでしょう。

思い返せば、私が日本中国学会の幹事を務めていたのは、今から二十六年ほど前のことです。当時既にワープロは市販されていましたが、機械が苦手な私は手が出ないでいました。私の前任の幹事はお二人とも年配の方で、理事会議事録などもきれいに手書きされたものでした。結局悪筆の私はワープロ購入に踏み切って、一字一字打ち始めることにしました。幹事業のおかげで次第にワープロが使えるようになったわけです。当時の仕事で面倒だったのが名簿の校正で、当時はまだ活字使用でしたので、飯田橋にあった印刷所で缶詰になって一字ずつ校正をしたことを覚えています。

また当時は今のような委員会制ではなかったため、理事長のもとで幹事二名が全ての業務を行いました。私が事務全般を務め、もう一名は会計を務めたわけです。学会費の徴収はもちろん、全ての会議や論文審査や選挙管理な

どの事務作業、名簿の作成から学会報の発送までを行いました。特に当時はメールなど無く郵便と電話による連絡だったので、郵便物が来る湯島の聖堂には常に誰か行っていなければなりません。そこで大学院生に謝金を払い交替で毎日聖堂から郵便物を私の研究室に運び込んでもらいそれをチェックしながら、週に一、二日は私自身が行くようにしていました。特に幹事一年目は日本道教学会の幹事も兼任していましたので、研究どころではなく学会事務が専門になっていました。

ともかくこのような理事長一幹事体制が続いていましたが、それが創立五十年を機に今のような理事長一理事一委員会一幹事体制に変わったわけです。それによって、より多くの会員が学会の運営に直接関わることになったのはけっこうなことだと思います。ただ近年は会員諸氏それぞれの職場の仕事が以前にもまして増加し、学会活動に割ける時間は少なくなっているような気がします。また大会の会場も、会場使用料を徴収したり休日には校舎を閉鎖する大学が増えてきて、なかなか簡単に調達できなくなりました。大学院生が減っていることも、大会運営スタッフの確保が困難なものになっております。

学会を長続きさせるには、一部の方々に無理が集中してはならないということが原則ですが、現実にはなかなか難しいことです。ともかくも委員会の再編成を含め、現状をもう一度点検整理しながらいろいろと模索する時期に來ていると思います。

現在、団塊の世代が大学を退職する時期を迎え、それとともに学会を退会する現象が広がっています。また中国学ひいては人文学の分野では学部や大学院の学生数が減少傾向にあります。会員の減少による学会費収入の下降は、学会運営にも大きな影響を及ぼし、そのため活動も制限されてきています。川合康三前理事長はこの厳しい現実を正面から見据え、それを乗り越えるべく尽力され、様々な試みをなされました。それをふまえ、更にありうべき学会像の実現を求め努力することが今求められています。このたび理事長の職を拝命し、とてもその任に堪える自信はありませんが、会員各位のご鞭撻のもとにこれらの課題に対して微力を尽くしたいと存じます。

儒学に関する 国際学術シンポジウムの 開催状況

北海道大学
佐藤錬太郎

近年、中国大陸のみならず、台湾やシンガポールなど、東アジアにおいて、儒学、特に朱子学と陽明学に関する国際学術シンポジウムが盛んに開催されるようになり、研究交流が進展しています。そこで、2014年に筆者が出席したシンポジウムを中心にシンポジウムの開催状況の一端をご報告したいと思います。

2014年1月には、紹興市人民政府と浙江省社会科学院（国際陽明学研究中心）の主催で、「紀念王陽明逝世485周年学術研討会」が紹興市で開催され、蘭亭の王陽明の墓前で祭祀活動が行われ、蘭亭、王陽明の故居、天泉橋跡、劉宗周の故居、蕺山書院などの遺跡を見学しました。参加者は中国(38名)、香港(1名)、台湾(8名)、日本(佐藤と難波征男教授の2名)、シンガポール(2名)、韓国(8名)、アメリカ(1名)でした。

6月には、広州の仏山市で康有為の記念公園の起工式があり、中山大学嶺南文化研究院の主催で、「理学与嶺南社会文化国際学術研討会」が開催されました。参加者は中国(19名)、香港(6名)、台湾(4名)、カナダ(1名)、日本(佐藤と三

浦秀一教授、永富青地教授夫妻の4名)、マレーシア(1名)シンガポール(1名)でした。28日には西蕉山の景勝区や湛甘泉の大科書院遺跡、南海観音文化苑、南海博物館等を見学しました。

9月18～19日にはシンガポールの南洋孔教会の創立百周年を記念する「儒学与国際華人社会」国際儒学研討会が開催されました。発表者は、中国(7名)、香港(6名)、台湾(10名)、韓国(2名)、日本(佐藤と永富青地教授の2名)、マレーシア(1名)シンガポール(2名)でした。シンガポールの華人の家庭では約67%が中国語とその方言を使用し、インドネシアでは24%にすぎないそうです。儒教が華人社会に大きな影響を与えているという印象を受けました。

9月24日～27日には、北京市で国際儒学連合会主催の「紀念孔子誕辰2565周年国際学術研討会」及び第五回の会員大会が開催されました。24日午前に北京人民大会堂で開幕式が開催され、習近平主席が臨席して講演を行い、「孔子を研究し、儒学を研究することは、中国人の民族的特性を認識し、現在の中国人の精神世界の歴史的由来を認識する一つの重要なルートである」と述べて、儒学に対して中国の優秀な伝統文化という高い評価を与えました。特に「中華民族は従来から平和を愛好する民族であり、平和を愛好するのは儒家思想の中にまた深い淵源がある」と述べ、「国大なりと雖も、戦いを好めば必ず亡ぶ」という古語を引用したのが印象に残っています。批林批孔運動の



9月国際儒学連合会シンポジウム

時期とは隔世の感があります。25日午前には会員大会が開催され、中国大陸の学者162名と世界各国からの招待者、合計312名の理事が選出されました。日本中国学会の関係者では、土田健次郎氏が副会長に、吾妻重二氏が副理事長に、石川忠久氏、池田知久氏が名誉顧問に、戸川芳郎氏が顧問に、土田健次郎氏と佐藤が理事に選出されました。会議に出席し、研究報告したのは佐藤と小幡敏行氏でした。27日午後、高速鉄道で山東省曲阜に移動し、28日に孔子生誕2565周年祝賀式典に参加しました。創立20周年を迎えた国際儒学連合会は5年ごとに大会を開催しています。中国政府の支持を得て会の財政は豊富だそうです。

10月には台湾中央研究院近代史研究所の呂妙芬博士が福建省武夷山で開催した「明末清初思想史再探」会議に三

浦秀一氏らと参加しました。学生1万6千人を擁する武夷学院には、宋明理学研究センターと朱子学研究センターが新設されていました。2014年には武漢大学に陽明学研究所が設立され、2015年に陽明学の研究誌『陽明学研究』を創刊する予定だそうです。創刊号への寄稿と顧問への就任を依頼されました。

以上、ご紹介したように、中国、台湾、香港、韓国、シンガポール等、東アジア地域では学术交流が盛んで、国境を越えた研究者の就職、異動も頻繁です。中国だけでも研究者数は日本の十倍どころではありません。国際シンポジウムは、研究発表の好機であるだけでなく、外国の研究者と知り合い、研究交流の輪を広げる好機です。日本中国学会の若手の会員におかれては、積極的に参加していただきたいと思います。



10月「明末清初思想史再探」会議

和漢比較文学会 第7回特別例会報告

堀 早稲田大学
誠

最初に和漢比較文学会の設立ならびに活動について、学会HPから紹介しておきたい。

和漢比較文学会は、昭和58(1983)年10月に、「日本古典と漢語文化圏の文学・文化との比較研究の進展」に寄与することを祈念して設立された、学術団体です。日本文学のさまざまな面における大陸の文化や文学の影響を深く広く探求し、日本古典文学の中にある漢詩・漢文の形態をとるものの実態を明らかにして、わが国の文学史の中に正しく位置づけることを目標としています。また古来の和漢比較的研究の伝統を継承しながら、さらに日本文学、中国文学の学際的な研究を総合し、新しい古典学をめざしたいとも願っています。

日本が古くから一衣帯水の大陸の国々や地域と密接に関わりながら発展してきたことは周知の所であり、その和漢比較的研究はより深い〈日本〉と〈中国〉の理解を拓いてくれるものと考えます。活動は32年目を迎え、現在、年間例会4回(西部・東部の交互開催)、大会1回、機関誌「和漢比較文学」年2回発行(8月、2月)をルーティンな事業とし、これに国内外で随時開催される特別例会が加わる。国内外およそ600名の会員を擁し、年会費3000円とは思えないアグ

レッシブでタフな事業が維持されている。

海外での特別例会は、2008年9月に台北の国立台湾大学で開催されたのが最初で、以来ほぼ年1回のペースで継続的に企画されている。第4回となる2011年9月には西安の西北大学で開催され、現在は両大学での隔年開催となっている。特別例会のコアは通例2日間にわたる研究発表会であり、前後には自由参加による前夜祭(交流会)とエクスカージョンが企画され、毎次友好親善の和気霽々たる空気の中にも研究発表には会場を挙げて真摯に向きあう国際学術交流が展開されている。

第7回特別例会は、2014年8月28日(木)・29日(金)の両日、国立台湾大学文學院演講ホールを会場として実施された。前日の27日(水)には夕刻5時30分に台湾大学正門前に集合の上、恒例の研究交流会〔前夜祭〕が催され、30日(土)には北台北方面へのエクスカージョンが企画された。

◎第1日 8月28日は、10時20分から開幕式を行い、新聞一美代表理事の開会の挨拶につづいて、会場校である国立台湾大学を代表して日本語文学系所主任の范淑文先生から歓迎の挨拶を賜り、朱秋而氏(台湾大学)・洪瑟君氏(台湾大学)の進行にてスタートした。発表順は、相田満特別例会委員長のアイデアにより、エントリーされたタイトル・概要(3月15日締切)および予稿論文(6月末日締切)によってテーマ分類の上、プログラム化されたものである。発表時間は質疑を含めて30分。

■「情感と文学」

陳文佳(中：華東師範大学)：森春壽の悼亡詩について、魯成煥(韓：蔚山大学)：沖縄民謡から見た和漢韓(三国)の文化交流

■「儀礼と神仏」

千葉恭子(日：和漢香文化研究所)：「返魂香」物語成立過程と漢武帝の「香」逸話、菊地 真(日)：天狗説話と即位灌頂、谷口孝介(日：筑波大学)：貞観五年御霊会を読む—『日本三代実録』の方法—

■「受容と変容」

呂天雯(日：早稲田大学[院])：大江匡衡の「言志」詩について、相田満(日：国文学研究資料館・総合大学院大学)：日本における幼学書の享受の視点から見た『蒙求』

■「本草と身体」

任穎(日：広島大学大学[院])：柏木如亭『詩本草』の「魚」について、丹羽博之(日：大手前大学)：噓の俗信を巡っ

て～日本中国の「嘆」の比較～

◎第2日 8月29日(金)は、朱秋而氏と岡部明日香氏(慈濟大学)の進行によって発表が進められた。

■「近代と古典」

堀誠(日:早稲田大学):「人虎伝」と「山月記」—二つのテキストの空間を再考する—

■「伝統と形象」

黄昱(日:総合研究大学院大学[院]):「灯下読書」の和と漢—『徒然草』第十三話を例に一、陳斐寧(台:靜宜大学)「南国」をめぐる想像力—王朝文学と檳榔—、井上一之(日:群馬県立女子大学):張継「楓橋夜泊」の受容

■「構造と享受」

惠阪友紀子(日:関西大学[非]):『和漢朗詠集』における李嶠百二十詠の利用、三田明弘(日:日本女子大学):日中の類書・説話集の構成における『冥報記』説話の受容

■「説話と伝承」

清水浩子(日:大正大学[非]):説話にみられる王喬と小野篁、増子和男(日:茨城大学):姑獲鳥とウブメの間—凶鳥と羽衣伝説の習合を中心として—、陳明姿(台:台湾大学):『今昔物語集』における猿説話と中国文学—猿神退治譚を中心にして—

都合18名による発表の終了後、閉幕式では、相田満特別例会委員長の総括ならびに謝辞に続いて、台湾大学を代表して陳明姿氏の挨拶があり、会場を易牙居に移して懇談の後に散会したが、今回は韓国からの参加もあり、国際性が増してきたといえる。

翌8月30日は、8時30分に台湾大学正門前集合で、北台

北方面のエクスカージョンに出発。貝殻寺、新十八王公廟を午前中に見学し、基隆、「悲情都市」や「千と千尋の神隠し」ゆかりの九份を参観。折りから貝殻寺は廟会の日で、民衆に敬愛される済公の姿に間近く接し、民間信仰のありようを目の当たりにした。夕刻、台湾大学の校友会館にご案内いただき、夕食をともにしてすべてのスケジュールを無事に消化することができた。ひとえに台湾大学の先生方のご尽力に感謝申し上げる。

日本中国学会においては、2010年10月開催の第62回大会(広島大学)から研究発表に「日本漢文部会」が開設されている。当時の池田知久理事長の「2010年度広島学大会を振り返って—任期終了の挨拶と報告—」(『日本中国学会便り』2010年度第2号)には、

「日本漢文」の試みは、部会での発表・司会も充実しており、参加者も少なくなかったのではなかろうか。その基盤としては、「日本漢文」に対する本学会会員の、相当に幅広くかつ根強い関心があるように感じられます。

と述べ、和漢比較文学会と全国漢文学会の会員への入会勧誘によって都合25名が新入会した旨も報告する。和漢比較文学会からも後藤昭雄氏(元代表理事)が「和漢比較文学会について」(同2011年第1号)を寄せ、その後、堀池信夫前副理事長の「日本漢文部会について」(同2012年第2号)において常設をめぐる方向性も示されている。第7回特別例会の活動報告にあわせて、日本中国学会の有志の新たな参加をも含め、今後の双方向的な展開を期待して筆を擱く(第8回は本年8月29日～31日に西安で開催)。



会場での記念の1枚

中国近世語学会の沿革と 近年の動向

—ワークショップ「官話音研究の資料と問題点」—

千葉 謙悟
中央大学

中国近世語学会は香坂順一・宮田一郎両氏をはじめとするメンバーにより1962年に「清末文学言語研究会」として発足し、翌年には「明清文学言語研究会」と改称した。1985年に研究会は「中国近世語研究会」へ名称変更し、1995年に至って現在の「中国近世語学会」を称し学会組織となった。中国近世語学会のホームページ(<http://www.kinseigo.chu>)には1985年からの沿革のみを記すが、清末文学言語研究会の設立から数えればすでに50年を超える、歴史ある研究組織といえることができるだろう。

研究会の名称の変遷から明らかとなっており、研究対象となる言語は清末、明清そして近世全体へと拡大していった。「中国語を歴史的に見る」ことを共通点としつつも、対象となる時代や分野は非常に幅広いものであり、それが本会の特徴の一つといってもよいだろう。

本会の会報は1962年7月に『清末文学言語研究会会報』として創刊され、1963年の第4号より『明清文学言語研究会会報』と改称、さらに1977年の第16号より『中国語研究』と題して現在に至っている。巻号は『清末文学言語研究会会報』より一貫して与えられ、2014年には最新号(第

56号)を出版した。『中国語研究』は目下中国近世語学会の機関誌としての役割を果たす査読誌である。最近の号のバックナンバーについては上記学会ホームページより目次を確認できる。

現在の会員は100人余り。決して多数とは言えないが、佐藤晴彦現会長の下、研究集會を年に二度行い、かつ定期的な雑誌の刊行を続けていることは特筆してよいだろう。大会として毎年6月に「研究総會」、12月に「研究集會」を開催している。

近世語学会では組織の若返り、研究活動の活性化を図って近年いくつかの試みを実施してきた。一つには若い世代の理事の追加である。研究会時代から現在まで会の活動をリードされてきた従来の理事に加え、新たに山田忠司、竹越孝、塩山正純、千葉の四会員を理事とし、組織の若返りを図った。

もう一つは研究集會におけるワークショップの開催である。2011年の秋期研究集會においては「官話の虚像と実像」というワークショップを企画した。これは明清期の言語研究において重要な「官話」について主に文法・語彙の面から討論するというものである。

さらに2014年12月には愛知大学東京サテライトにて「官話音研究の資料と問題点」なるワークショップを企画した。これは先述の「官話の虚像と実像」を継ぐものである。ここでは官話の音声・音韻を研究する上での資料を紹介し、さらには現在の論点についても議論を行った。今回主に紹介したいのはこのワークショップにおける議論である。発表者として神戸市外大の太田斎氏、早稲田大学(非)鋤田智彦氏および千葉の三人がそれぞれ『華夷訳語』・『西儒耳目資』、朝鮮・満洲資料そして西洋資料の概況を紹介し、その後フロアを交えた全体討論を行った。

太田斎氏の「近世音資料の可能性—華夷訳語、西儒耳目資を例に一—」では、近世音資料の音韻特徴を研究する場合はその守旧的な面を考慮すべきことと、音韻学の知識無しには判断を誤る所もあることを述べる。

王朝交代当初、特に漢族文化の担い手ではない支配者の王朝にあっては、かなり口語的な特徴が文献に顔を出すことがあるが、社会が安定すると、文言の様相が色濃くなり、過去の文献からの引用が盛り込まれて、時代を逆行す

るかのように古い特徴が出現することもある。今回は『華夷訳語』、特に『西番(館)訳語』と『西儒耳目資』を例に、そこに現われている特徴の一部は守旧的要因が齎したもので、必ずしも直ちに当時の音韻特徴と見做すことはできないこと、そしてそのような要素を排除して残る、方言的特徴と見做し得る要素がどのようなものかを併せて紹介した。

鋤田氏の「朝鮮・満洲資料から見た中国北方語音」ではまず朝鮮資料、満洲資料のうち音韻史上重要と思われるものの年代順に概説を行った。朝鮮資料は15世紀半ばの訓民正音(ハングル)制定以降、それにより中国語音を表記したものが中心となる。『老乞大』・『朴通事』の諸版においては音の変遷を明確にみてとることができる。例えば現代北京語でerと発音される「兒」「二」などの字は、古い版本では他の字と同様に母音終わりであるのに対し、新しい版本では「1」終わりで表記される。また『老乞大』の一部の版本に見られる、声調を表す傍点がいかに付けられているかについて、その傾向を探った。

同様に満洲資料も17世紀半ば以降の中国北方語音を反映しており、資料や時期により字音の違いを反映したと見られる各種の表記が見られる。近世語音における大きな論点である尖団音の合流をはじめ、入声由来字や個別的に例外的な読音を持つ字がどのように綴られているかなど、注目すべき点について、朝鮮資料とあわせて表記を対照し、北方語音の特徴を提示した。

最後に千葉の「欧文資料と官話音研究一意義・現状・課題一」では三つの話題に触れた。第一に、16~20世紀にかけて蓄積された欧文資料を字典、文法書、教科書、宗教文書の4種に分類して概観した。第二に、官話音研究におい

て欧文資料が重要な鍵を握る問題について紹介した。まず「二」「而」のような字の読音であり、ピンインでerと書かれるような音価は、欧文資料においてトリゴ『西儒耳目資』(1626)やウェアロ *Arte de la Lengua Mandarin* (官話文典・1703)にとどまらず広く見られる。次いで「没」字におけるmeiのごとき音は1870年代以降では珍しくない。最後に官話音の声調調値は17世紀初頭から100年以上安定しているように見えるが、プレマール *Notitia Linguae Sinicae* (漢語割記・ca.1728)あたりを境に変化し始めているかのごとくである。第三に、官話音研究に欧文資料を用いる際の問題点を指摘した。すなわち当該資料の記録対象を吟味すべきこと、資料に作者自身による作例が出現すること、欧語の正書法と音価の史的変化を資料のローマ字にどうあてはめるかという問題の三点である。

全体討論では、個別の資料や現象に関する質疑応答とともに、官話の南北差が生まれた背景とその通時的変遷、あるいは文言・白話・文白混淆等の文体との関連といった方向にも話題が及び、報告者とフロア、あるいはフロア同士で熱心な議論が交わされた。官話音研究においては、今回のワークショップで取り上げられたような諸言語との対音資料が重要な役割を果たす。学会の設立経緯からして語彙・語法の研究者が主体である本学会の会員諸氏にとって、音声・音韻面から官話を研究するための手法と問題点を知る有益な機会となった。

次回の研究集会は2015年6月6日(土)に関西大学で開催され、著名な近代漢語研究者蔣紹愚教授による講演会も予定されている。中国語の歴史研究に志のある方々の積極的な参加を期待したい。



ワークショップ発表者・司会者



学会会場全景

❖ 国内学会消息 (平成二十六年)

北海道中国哲學會

○例会

4月25日

・『説文解字』紜の段玉裁注讀後雜感

北海道大學大學院文學研究科専門研究員 和田 敬典

5月30日

・五井蘭洲の『非物篇』

北海道大學大學院文學研究科博士後期課程 王 天波

7月4日

・日本における易とト

北海道大學大學院文學研究科准教授 近藤 浩之

8月2日(修論構想發表會)

・會澤正志齋の君臣論

北海道大學大學院文學研究科修士課程 武石 智典

・『傳習録』の知行合一について—中江藤樹の理解を中心に—
北海道大學大學院文學研究科修士課程 石 海濤

10月24日

・清華大學藏戰國竹簡『筮法』について

北海道大學大學院文學研究科専門研究員 大野 裕司

12月5日

・郭店楚簡『太一生水』の思想—生成論と處世訓—

北海道大學大學院文學研究科専門研究員 西 信康

平成27年1月30日(卒論・修論報告會)

・王符『潜夫論』の人間觀

北海道大學文学部學士課程 吉田 勉

・『臺灣通史』鄭成功關連記事についての考察

北海道大學文学部學士課程 三好 奈央

・藤原惺窩の研究—『大學要略』を中心に—

北海道大學大學院文學研究科修士課程 關 雅泉

○研究發表大會

第四十四回研究發表大會並總會(8月30日 於北海道大學人文・社會科學總合教育研究棟W308)

・王夫之における『四書大全』の批判と繼承—『讀四書大全說』を中心に—

北海道大學大學院文學研究科博士後期課程 文 盛載

・荻生徂徠の「中庸」注釋について

北海道大學大學院文學研究科博士後期課程 趙 熠焯

・年號勘文資料所引の經傳テキストについて

琉球大學教育學部教授 水上 雅晴

・大念佛寺本『毛詩』二南殘卷について

上海師範大學哲學學院教授 石 立善

・關學と洛學との間—「赤子之心」を手がかりとして—

苫小牧工業高等専門學校文系總合學科教授 山際 明利
(近藤 浩之 記)

北海道大學中國語・中國文學談話會

第243回 (2014年2月22日)

【卒業論文報告會】

・西太后—おもに徳齡の作品から— 篠原 尚子

第244回 (2014年3月1日)

・漢字音表記から日本古典を再検討する—金刀本保元物語とキリシタン— 佐藤 進

第245回 (2014年6月7日)

・中華圏サブカル諸相—SF、出版、翻訳— 山本 範子

第246回 (2014年9月19日)

・滑稽な闖入者—沈從文と蕭紅の描く女學生—

濱田 麻矢

第247回 (2014年11月22日)

【修士論文中間報告會】

魏晉南北朝期の「異界訪問譚」について 趙 丹丹

○刊行物

『饕餮』第二二號(2014年9月)

『火輪』第三五號(2013年10月)

『連環畫研究』第三號(2014年3月)

(松江 崇 記)

秋田中国学会

◎平成26年度春季秋田中国学会第158回例会

5月17日(土) 於秋田大学総合研究棟二階講義室

・満洲国留学生の見た「帝国」日本—日本見学旅行記と在日留学生の日本認識— 羽田 朝子

・左伝所載魯史の編作意図 吉永慎二郎

- ◎平成26年度秋季秋田中国学会第159回例会
11月29日(土) 於秋田大学教育文化学部3号館2階3-255教室
- 中国における農村と農民工の現状について
佐々木 亮
 - 北燕の成立と5世紀の日本・朝鮮半島
内田 昌功
(羽田 朝子 記)

東北シナ学会例会

- ◎2月例会 2月12日・14日
(卒業論文・修士論文発表会、中国思想・中国文学分野のみ抜粋)

- (卒業論文発表会)
- 董仲舒の思想
堤 薫
 - 陸機「擬古詩十二首」の獨創性についての一考察
佐々木千晶
 - 李白の詩における比喩表現について—直喩を中心に—
志田奈津実
 - 「李徴」と「人虎伝」—テキストの変容をめぐって—
尾崎 希海
 - 『水滸伝』研究—物語内で規定されている登場人物の序列を中心に—
熊谷 絢子
 - 杜甫が松尾芭蕉に与えた影響について—『おくのほそ道』を中心に—
庄子 美央
 - 映画『さらば、わが愛／霸王別姫』の解釈の可能性
白田 涼太
 - 翻訳漫画を通してみる日本語・中国語のオノマトペの比較研究—『毎日かあさん』を題材として—
小松 みか
- (修士論文発表会)
- 『律條公案』における現実と虚構
堀川 慎吾
 - 魯迅と日本自然主義文学
李 佳

- ◎4月例会 4月26日
(新入生歓迎会)
- 明朝の提学官王宗沐の思想活動と王門の高弟たち
三浦 秀一
(高橋 睦美 記)

東北大学中国文学談話会

- ◎平成26年度 第1回中国文学談話会 7月25日
(卒業論文構想発表会)
- 李白と王維の詩における白色
阿部江莉子
 - 「シャーロック・ホームズ」の漢訳と日本語訳の比較
青柳 杏奈

- 『大江大海一九四九』から考える台湾のアイデンティティ
渡邊 千晶
- ◎平成26年度 第2回中国文学談話会 11月14日
(卒業論文中間発表会)
- 李白と王維の詩における「白」と「素」
阿部江莉子
 - 英文学の中国語翻訳について『シャーロック・ホームズ』を題材に
青柳 杏奈
 - 『大江大海一九四九』から考える台湾のアイデンティティ
渡邊 千晶
(田島 花野 記)

東北大学中国哲学読書会

- ◎第178回中哲読書会 7月15日
(修士論文構想発表会)
- 「庭前栢樹子」問答について
祝 釗
- ◎第179回中哲読書会 9月26日
- 黄宗羲の詩文観—錢謙益の影響から独自の詩文実践へ—
豊島ゆう子
 - 唐玄宗御注・御疏における「重玄」要素
高橋 睦
- ◎第180回中哲読書会 11月6日
(卒業論文構想発表会)
- 章炳麟『齊物論釈』における天籟寓話について
新目 知博
(高橋 睦美 記)

筑波中国学会

- 例会
- 5月15日(木)
- 蘇軾「西湖詩」考釈 中日詩歌比較注釈の視点から
王 連旺
- 5月22日(木)
- 劉禹錫詩の「秋日」について
荒川 悠
- 6月5日(木)
- 李賀「酒罷、張大撤索贈詩、時張初効謔幕」の第10句をめぐって
小田 健太
- 6月12日(木)
- 陶淵明の「擬古」詩と詠史詩
宇賀神秀一
- 7月10日(木)
- 試論「江南逢李龜年」
荒井 礼
- 7月17日(木)
- 『聊齋志異』翩翩考
高橋 恒輔

- 7月24日(木)
- ・王績「独坐」詩小考 阮籍・陶淵明受容の観点から
加藤 文彬
- 10月23日(木)
- ・李賀詩における年齢表現について 「二十」の肖像
小田 健太
- 10月30日(木)
- ・陶淵明「擬古」詩其二小考 陶淵明の田子泰観
宇賀神秀一
- 11月13日(木)
- ・『四河入海』の注釈特色について 王 連旺
- 11月20日(木)
- ・劉禹錫詩《再遊玄都観》の「劉郎」論 荒川 悠
- 12月4日(木)
- ・『聊齋志異』続黄梁考 高橋 恒輔
- 12月18日(木)
- ・鮑照詩文に於ける時間認識 「観漏賦」を中心に
加藤 文彬
 - ・漢文における格闘描写について 荒井 礼
- 刊行物
『筑波中国文化論叢』第33号(10月)
(稀代麻也子 記)

お茶の水女子大学中国文学会

- 大会 4月26日(土)
- ・敦煌写本「醜女縁起」について 伊藤美重子
 - ・永井荷風『下谷叢話』を読む 和田 英信
- 7月例会 7月5日(土)
- ・鍾梅音の散文にみられる“家庭主婦”の意象
天神 裕子
 - ・柴静著『中国メディアの現場は何を伝えようとしているか』翻訳出版を巡って 杉村安幾子・河村 昌子
- 9月例会 9月6日(土)
- ・宋代における寺院茶会の研究—『神苑清規』を中心として
趙 亜男
 - ・『辺境から訪れる愛の物語』の翻訳について
小島 久代
- 12月例会 12月6日(土)
- ・从逻辑学角度浅析“既然p,就q”与“如果P,就q”的异同与相互转换 王 芸嫒
 - ・テアル形に相当する中国語表現 齋藤 萌

- ・“A一个B”と“A一次B”における“一个”と“一次”との違いについての一考察 ABが動賓型離合詞である場合
郝 静
(竹野 洋子 記)

中国化学会

- ◎大会
- 6月28日 北海道教育大学
- [研究発表]
- ・李賀の「酒闌感覚中区窄」の句をめぐる 筑波大学大学院 小田 健太
 - ・唐代立春関連詠作に関する研究 筑波大学大学院 隋 源遠
 - ・董其昌「書の時代性説」成立の背景—唐人書に存する「法」の称揚に着目して 安田女子大学 尾川 明穂
 - ・会沢正志斎の『中庸積義』について 常盤大学 松崎 哲之
 - ・北朝における建安の佚響 文教大学 樋口 泰裕
 - ・敦煌本論語疏に見える「無為、謂不躁動也」は郭象の説か 東京外国語大学名誉教授 高橋 均

[シンポジウム]

- 漢詩教材としての杜甫の詩
- パネリスト 北海道教育大学 後藤 秋正
長野県短期大学 谷口真由実
北海道立旭川東高等学校 大村 勅夫
司 会 北海道教育大学 大橋 賢一

- ◎月例会
- 3月8日 大妻女子大学
- ・巴金『随想録』再考—「書く」ことの意味— 一橋大学大学院 近藤 光雄
 - ・鄧実にみる筆写文字資料の影印出版について 筑波大学 菅野 智明
- 5月11日 大妻女子大学
- ・梁武帝「異趣帖」に関する考察—王世杰旧蔵本を中心に— 茨城県立水戸第二高等学校 下田 章平
 - ・「正しい」字音とは? —「栖(棲)」を例に 筑波大学 小松 建男
- 10月4日 大妻女子大学
- ・趙次公「和蘇詩」初探 筑波大学大学院 王 連旺
 - ・『尚書』における「言」と「事」—前漢期における尚書観の一端— 千葉大学 内山 直樹
- 12月6日 大妻女子大学
- ・長尾雨山の印学について 大妻女子大学 松村 茂樹

・『官許問答便語』多重同音字注について

文教大学 蔣 垂東
(阿川 修三 記)

六朝学術学会

◎例会

○3月15日(土)第28回研究例会 於 二松学舎大学

[報告]

・南朝梁・蕭綱「文章放蕩論」試論

高崎経済大学 大村 和人

・中国における畜類償債譚の受容

聖学院大学非常勤講師 福田 素子

・『抱朴子』の文学論と「道」への指向

早稲田大学 渡邊 義浩

○12月6日(土)第29回研究例会 於 二松学舎大学

[報告]

・「箕踞」と「竹林七賢」 中央大学院 河野 哲宏

・阮籍「詠懐詩」における価値観をめぐって

二松学舎大学院 小島 朋子

・『搜神記』における天人相関説と五気変化論

早稲田大学 渡邊 義浩

◎大会

○6月21日(土) 第18回大会 於 二松学舎大学

[報告]

・『後漢書』南蛮伝と劉宋における「南蛮」の政治的意義

大東文化大学院 三津間弘彦

・顔延之「北使洛」に見える「懐古詩」の形成

早稲田大学非常勤講師 住谷 孝之

・『搜神後記』における仏教関連話—陶淵明と仏教の関係
再考を兼ねて

和光大学 佐野 誠子

・『文選』編纂に見る「文」意識 二松学舎大学 牧角 悦子

[記念講演]

・六朝義疏学から唐『五経正義』へ

二松学舎大学教授 野間 文史

◎刊行物

『六朝学術学会報』第15集(3月末日)

(大村 和人 記)

日本漢詩文学会

(〈宋元文学会〉から名称を変更)

◎ 第三回例会 (3月8日 於 共立女子大学)

・詩吟 孟浩然「春暁」 漢詩サークル〈李太白〉 櫻本 武志

・浅井忠の滞仏漢詩について

郡山女子大学短期大学部 齋藤美保子

・破体書と松本筑峯の書について

東洋書道芸術学会評議員 石川 美穂

・旅順における乃木将軍の詩作—志賀重昂とのかかわり
を含めて

全日本漢詩連盟常務理事 中山 正道

・倉田貞美の生涯と学問

学校法人 倉田学園評議員・疚心洞主人 倉田 定宣

◎第四回例会 (9月13日 於 共立女子大学)

・小曲演奏 ヘンデル「ラルゴ」

(ピアノ独奏) 戸田 和子

・中村敬字の愛敬余唱について

普連土学園中学高等学校 野村 純代

・和刻本『博物新編』の謎について 玉川大学 中村 聡

・手塚治虫に見る儒教の土着化(2)

共立女子大学 宇野 直人

・漢詩吟詠 本宮三香「碓を聞く」

漢詩サークル〈李太白〉 櫻本 武志

*作品解説 宇野 直人

・倉田貞美の生涯と学問(続)

学校法人 倉田学園評議員・疚心洞主人 倉田 定宣

◎活動

I 朱子絶句研究部門

『朱子絶句全訳注—『文集』巻六』の刊行準備のため、共立女子大学・早稲田大学にて定期的に輪読を続行(松野敏之、宇野直人ほか)。

II フランス中国学研究部門

アンドレ・レヴィ原著『中国古典文学』(クセジュ296)の和訳を刊行(中野茂訳・宇野直人注解、明德出版社、6月)。

III 近代漢詩文研究部門

『倉田貞美著作集』全5巻の刊行が決まり、各巻の内容等について出版社と協議中(倉田定宣・田山泰三)。

(松野 敏之 記)

日本聞一多学会

◎大会

第18回 日本聞一多学会 第3回 日本郭沫若研究会 合同研究大会

日時：7月12日(土) 13:30～

場所：関東学院大学金沢文庫キャンパスK-307, K-308

◎研究発表

- ・ 聞一多の中国文学史構想—「四千年文学大勢鳥瞰」—
二松學舎大学 牧角 悦子
- ・ 郭沫若「残春」と結核
国土館大学 藤田 梨那

◎報告

- ・ 日本における聞一多研究
二松學舎大学・非 横打 理奈
- ・ 最近10年の郭沫若研究—私的回顧—
九州大学名誉教授 岩佐 昌暉
- ・ 中国における聞一多研究
中国社会科学院・中国聞一多学会副会長 聞 黎明

◎刊行物

『神話と詩』第13号(2015年3月)

(野村 英登 記)

国土館大学漢学会

◎第49回大会(12月20日) 於10329教室

(留学生帰朝報告)

- ・ 北京師範大学留学 4年 中玉利誠一
[研修報告]
- ・ 台湾研修 卒業生 河野 幸彦
2年 永田 諒乃
伊藤 優人

(卒論発表)

- ・ 『老子』研究 4年 伊原 紘平
- ・ 『菜根譚』研究 4年 沢村 拓海
(講演)

・ 江戸は漢詩にどう詠まれたか 鷺野 正明

◎第3回詩文朗読コンテスト(12月20日) 於10329教室

- ・ 散文部門(老舎「思北平」) 1位 長屋めぐみ(2年)
- ・ 漢詩部門(陶淵明「結廬在人境」杜甫「春望」)
1位 戸丸 凌太(3年)

◎刊行物

・ 『国土館大学漢學紀要』第16号

(鷺野 正明 記)

日本漢文小説研究会

◎月例研究会 於湯島聖堂斯文会館

5月11日

- ・ 藍沢南城「紀事」について 村山 敬三

7月22日

- ・ 張潮『虞初新志』と菊池三溪『本朝虞初新誌』
小塚 由博

12月21日

- ・ 書簡から見た張潮の叢書編集状況—王漁洋を一例として—
小塚 由博
(鷺野 正明 記)

明清文人研究会

○月例研究会 於湯島聖堂斯文会応接室

4月20日(日)

周道振・張月尊輯校『唐白虎全集』中国美術学院出版社
2002年発行「年表」読解

6月15日(日)

周道振・張月尊輯校『唐白虎全集』中国美術学院出版社
2002年発行「年表」読解 読了

明清文人研究会編『唐寅』編集会議

9月21日(日)

台湾國立故宮博物院『明四大家特展—唐寅』参観報告なら
びに徐渭書跡特別調査報告 荒井 雄三 河内 利治
(河内 利治 記)

日本詞曲學會

(2014年8月に宋詞研究會から日本詞曲學會に名稱を變更しました)

○詞籍提要譯注檢討會

3月15日(土), 16日(日) 於日本大學商學部

『四庫全書總目提要』「詞曲類」の譯注および檢討

○『唐宋名家詞選』譯注檢討會

9月13日(土), 14日(日), 15日(月)

於中京大學文化科學研究所

龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および檢討

○小風絮會(『唐宋名家詞選』譯注)

2月1日(土)至12月20日(土)

於立命館大學文學部中國文學 專攻共同研究室

龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および檢討

○刊行物

『風絮』第十號(3月)
『風絮』第十一號(12月)

(池田 智幸 記)

日本宋代文学学会

◎第一回大会

2014年5月31日(土) 京都大学文学部第1講義室

○発表

- ・蘇軾對賦體的標學—以《超然臺賦》、《黃樓賦》為例—
李 棟
- ・曾布《水調歌頭》大曲述略
李 俊標
- ・“晚唐體”、“誠齋體”與“江湖體”—以詩歌的通俗化爲中心—
熊 海英
- ・文苑或儒林:思想史視野下的黃潛
慈 波
- ・宋末元初における「遺民」像
稲垣 裕史
- ・南宋詠花詩と花文化—江湖派を中心に—
加納留美子
- ・曾鞏筆下的女性書寫—一個來自儒家生命的思索—
王 基倫

- ・宋話本《錢塘湖隱濟顛禪師語錄》考論
朱 剛

○シンポジウム「近世出版文化の幕開け—宋代の文集編纂と流伝を巡って—」

- ・蘇軾『和陶詩集』流伝考
原田 愛
- ・福建の出版と詞籍
藤原 祐子
- ・宋編宋人文集と墨蹟・碑刻—南宋における蘇軾・黃庭堅詩注の編纂を中心に—
浅見 洋二

司会: 東 英寿

○総会

(浅見 洋二 記)

中唐文学會

◎第25回大会 10月10日(金)

於龍谷大学大宮キャンパス西麓大会議室

○研究発表

- ・同志を求める文学—貞元期の孟郊と韓愈の贈答詩を中心に—
丸井 憲
- ・張祜から劉禹錫への二詩
白石 尚史

○講演

- ・盛唐英靈交往之遺蹟—劉復墓誌考—
查 屏球

◎刊行物

『中唐文学会報』第二十一号

(中木 愛 記)

名古屋大学中国哲学研究会

○研究会

第75回研究会(7月10日)

【『名古屋大学中国哲学論集』第13号合評会】

- ・進藤浩司著「梶原性全の医の倫理」
服部 寛風

第76回研究会(9月29日)

【修士学位論文中間発表】

- ・朱熹の『論語』解釈とその変遷
服部 寛風
- ・五石散考
李 錚

第77回研究会(10月28日)

【修士学位論文中間発表】

- ・日本に伝わる『孝経述議』
石丸 羽菜
- ・林希逸の『老子』解釈について
水野 雅之

○刊行物

『名古屋大学中国哲学論集』第13号(5月25日)

(小崎 智則 記)

名古屋大学中国文学研究室研究談話会

◎中部地区中文交流会(中京大学文化科学研究所と共同開催)

7月12日(土)於中京大学名古屋キャンパス

【講演】

- ・実事と虚構
日本中国学会理事長 川合 康三
- ・中国地名カタカナ表記の研究—昭和二十年時代の国語審議会をめぐって—
中京大学国際教養学部教授 明木 茂夫

【研究発表】

- ・『左氏会箋』以前における竹添井井と『左伝』
名古屋大学博士研究員 竹内 航治

◎研究談話会

3月7日(金)【特別講演】

- ・近代中日交流の風景—清末の漢詩にある日本語—
遼寧師範大学教授 劉 凡夫

5月28日(水)【卒論中間発表】

- ・六朝志怪と唐代伝奇における動物譚について
鈴木 詩歩
- ・『古文真宝』における「蘭亭序」について
林 美江
- ・李白の「家庭」
古川 愛子

8月1日(金)【卒論・修論構想発表】

- ・『三体詩幻雲抄』から五山僧の美意識を探る
岩田 麻愛
- ・梅堯臣の悼亡詩
袴田 悠太

・『三体詩』李商隱の日本受容—解釈の観点から—
長谷川浩平

10月31日(金) [卒論中間発表]

- ・ 六朝志怪と唐代伝奇に見る動物観 鈴木 詩歩
- ・ 『古文真宝』における「蘭亭記」について 林 美江
- ・ 李白と家庭—西域文化との関わりから— 古川 愛子

◎刊行物

『名古屋大学中国語学文学論集』第27輯(8月)

同 第28輯(12月)

電子媒体。名古屋大学中国文学研究室HP・名古屋大学学術機
関リポジトリにて公開。

(竹内 航治 記)

京都大学中国学会

◎第二十九回例会

七月十九日(土) 京都大學文學部新館二階第三講義室

- ・ 顔真卿『懷素上人草書歌序』をめぐる疑問
京都大學 成田健太郎
- ・ 『索隱述贊』の文體 京都教育大學 谷口 匡
- ・ 小川環樹先生の漢詩—詩誌『雅友』による—
深澤 一幸

◎刊行物

『中國文學報』第八十四冊(二〇一三年四月付)

(木津 祐子 記)

中國藝文研究會

○合評會及び研究會

4月27日(日) 合評會・研究會(末川記念會館第二會議室)

- ・ 陶淵明「歸去來辭」の異文の一考察 富 嘉吟
- ・ 李清照の「失節」について 靳 春雨
- ・ 『全相平話』の「全相」と上圖下文スタイルについて
—『三國志平話』を中心に— 廣澤 裕介

7月27日(日) 研究會(末川記念會館第二會議室)

- ・ 銀雀山漢墓竹簡殘簡の整理についての一考察
石井眞美子
 - ・ 尾道の漢詩人・栗田鶴渚と『別天地』 萩原 正樹
 - ・ 再訪復旦所見書錄 芳村 弘道
- 11月2日(日) 研究會(諒友館八三一教室)
- ・ 韋應物の隱逸について 今場 正美
 - ・ 『江談集』における白氏詩文の考察 富 嘉吟

・ 再訪復旦所見錄(續)と朝鮮本『選賦抄評註解刪補』の紹介
芳村 弘道

○刊行物

『學林』第58號(3月)

『學林』第59號(11月)

(山内 貴 記)

東山之會

○研究發表 於京都女子大學

2月22日

- ・ 杜牧を通して見る晚唐文學と晚唐文學に於ける杜牧
愛甲 弘志

3月29日

- ・ 琴聲悠揚「聽琴圖」—試論「聽琴圖」之〈圖〉與〈琴〉—
李 俊標

4月26日

- ・ 陸游と范成大の交流 佐藤菜穂子

6月28日

- ・ 西鶴本における漢詩への一視點 張 凌志

7月26日

- ・ 蘇軾と音樂—黃州滯在期の作品を題材として—
中 純子

9月20日

- ・ 詩語としての〈美人〉と〈佳人〉 姜 若冰

10月18日

- ・ 白居易の茶詩の特徴について 馮 艷

11月23日

- ・ 天台三大部外勘鈔所引の雜傳小説類について
佐藤 礼子

12月13日

宋初における白居易詩文の受容—晁迥『法藏碎金錄』を中心—
澤崎 久和

○『長江集』譯註(2月22日至12月13日)

卷二「投張太祝」至「萬興」

(愛甲 弘志 記)

阪神中哲談話會

第399回例会 11月29日(於茨木市市民會館)

- ・ 『律呂新書』研究における諸問題—候氣術を中心として—
榎木 亨
- ・ 顔師古校注『漢書』の特徴 洲脇 武志

- ・戦国時代から秦漢時代に至る術数の変遷 大野 裕司
(橋本 昭典 記)

大阪大学中国学会

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/xuehui/index.htm>
(事務局は大阪大学文学研究科中国哲学研究室)

○刊行物

『中国研究集刊』第五十八号[闕号](2014年6月)刊行。
『中国研究集刊』第五十九号[珠号](2014年12月)刊行。

○国際学術交流

平成26年5月31日、台湾・国立高雄餐旅大学応用日語系との共催で、「アジア文化研究国際学術研討会—観光・言語・文学・思想—」を開催した。会場は国立高雄餐旅大学。

(中村 未来 記)

大阪大学・名古屋大学中国学研究交流会

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/lunwen/meidai/index.html>

○第十三回研究交流会 平成26年11月15日

大阪大学文法経講義棟三十二番教室

- ・仁宗認母の物語—包拯譚の一系譜—

大阪大学大学院文学研究科博士前期課程 黄 鶴

- ・近世日本儒学における排仏論について—『儒仏問答』「出家論」に関する一考察—

大阪大学大学院文学研究科博士前期課程 野口 真戒

- ・古典の開示と感知—文学的資源の未来—

名古屋大学教授 加藤 国安

(中村 未来 記)

懐徳堂研究会

(事務局は大阪大学文学研究科中国哲学研究室)

○研究会合

第十五回研究会 平成26年3月26日

大阪大学文学部中庭会議室

- ・大阪府立中之島図書館蔵五井蘭洲遺稿について

寺門日出男

- ・泊園書院の『大学』解釈—徂徠学の継承と発展—

矢羽野隆男

- ・新田文庫所蔵『懐徳堂記録拾遺』と懐徳堂記録

竹田 健二

- ・広瀬旭荘と幕末の大坂 岸田 知子
- ・懐徳堂デジタルコンテンツの制作について 湯浅 邦弘

第十六回研究会 平成26年6月29日

大阪大学文学部中庭会議室

- ・中井蕉園『騶碧囊』について 湯城 吉信

- ・盡くは書を信ぜざる儒者—中井履軒の經書觀と經學手法と— 黒田 秀教

- ・中井履軒と均田制 福田 一也

- ・「鶴学問」三宅石庵と陸象山 佐藤 由隆

- ・「東アジア文化交渉学会第6回年次大会」(中国・復旦大学)報告 竹田 健二

- ・報告・懐徳堂関係資料のデジタルアーカイブのための撮影について 福田 一也

第十七回研究会 平成26年8月25日

大阪大学文学部中庭会議室

- ・大阪府立図書館所蔵五井蘭洲関係資料について

寺門日出男

- ・中井履軒『史記雕題』伍子胥列伝について 杉山 一也

- ・並河寒泉『居諸録』に見える風聞—島津久光への期待—

矢羽野隆男

第十八回研究会 平成26年12月20日(土)

大阪大学文学部中庭会議室

- ・中井履軒『述龍篇』と八陣解釈 梶島 雅弘

- ・(新収資料)尾藤二洲宛書簡について 池田 光子

- ・懐徳堂文庫所蔵『管子纂註』書き入れの初歩的整理

草野 友子

- ・西村天因の懐徳堂研究と五井蘭洲関係資料

竹田 健二

- ・梅花学園資料室所蔵「中井終子関係資料」について

湯浅 邦弘

- ・懐徳堂文庫資料のデジタルアーカイブ化について

竹田 健二

○国際学術交流

平成26年5月8日・9日、中国・復旦大学にて第六回東アジア文化交渉学会が開催され、「懐徳堂研究」を主題とする分科会(C3)において下記の四名が研究発表を行った。

- ・『懐徳堂纂録』とその成立過程 竹田 健二

- ・中井積徳の史書注釈 寺門日出男

- ・懐徳堂学者の実学思想 藤居 岳人

- ・日本近世における「無鬼論」と祭祀と—懐徳堂学派を中心として— 黒田 秀教

平成26年5月31日、台湾・国立高雄餐旅大学にて「アジア文化研究国際学術研討会—観光・言語・文学・思想—」が開催さ

れ、竹田健二が研究発表を行った。

- ・山片蟠桃の合理主義—その論理と系譜— 岸田 知子
- ・『懐徳堂記録拾遺』と「懐徳堂記録」 竹田 健二
- ・中井履軒『服忌圖』の作成過程に見たる礼思想 黒田 秀教

○デジタルアーカイブ

科研費基盤研究B「懐徳堂の総合的研究」(研究代表者:竹田健二)の成果の一環として、平成27年2月、懐徳堂文庫所蔵『論語聞書』をデジタルアーカイブ化し、WEB懐徳堂(<http://kaitokudo.jp/>)での公開を開始した。

(湯浅 邦弘 記)

中国出土文献研究会

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/sokankenkyukai/index.html>

(事務局は大阪大学文学研究科中国哲学研究室)

○研究会合

第五十五回研究会 平成26年7月13日

TKP大手町ビジネスセンター

- ・銀雀山漢簡『民之情』小考 福田 一也
- ・上博楚簡『邦人不称』の「不称」 草野 友子
- ・清華簡『周公之琴舞』の文献的性格 中村(金城)未来

第五十六回研究会 平成26年12月26, 27日

大阪大学中国哲学資料室

- ・銀雀山漢簡『聽有五患』小考 福田 一也
 - ・上博簡《命》篇“鉦”字試解 曹 方向
- (通訳:草野友子)

- ・戦国時代における兵家の気の世界と新出土文献 竹田 健二
- ・清華簡『保訓』と「三体石経」古文 一科斗体の淵源— 福田 哲之

- ・戦国簡牘文字の書法様式に関する試論 福田 哲之
- ・上博楚簡『邦人不称』の全体構成—「不称」を手がかりとして— 草野 友子
- ・清華簡『周公之琴舞』考 中村 未来

○国内研究発表

平成26年3月8日

中国出土資料学会第三回例会(日本女子大学)において、中村(金城)未来が「清華簡『周公之琴舞』考」と題して研究発表を行った。

平成26年7月12日

中国出土資料学会第一回例会(成城大学)において、竹田健二が

「戦国時代における儒家の気の世界」と題して研究発表を行った。

○国際学術交流

平成26年5月31日、台湾・国立高雄餐旅大学にて「アジア文化研究国際学術研討会—観光・言語・文学・思想—」が開催され、湯浅邦弘・福田一也・草野友子・中村(金城)未来が出席、湯浅が講演、福田・草野・中村が研究発表を行った。

- ・観光資源としての老荘故里 湯浅 邦弘
- ・銀雀山漢簡『民之情』小考 福田 一也
(報告は中国語)
- ・上博楚簡《邦人不称》的“不称” 草野 友子
(報告は中国語)
- ・清華簡『周公之琴舞』の文献的性格 中村(金城)未来
(報告は中国語)

平成26年7月3~4日、中国・山東省済南舜和国際ホテルにて開催された、「2014年中文数字出版与数字図書館国際研討会(CDPDL)」に湯浅邦弘・草野友子・中村(金城)未来が参加し、草野が口頭報告を行った。学会後の文化考察(5日~7日)において、山東省博物館、山東大学図書館、泰山、三孔(孔廟・孔府・孔林)、孟廟・孟府などを視察した。

- ・日本京都産業大学図書館の建設與應用 草野 友子
- 平成26年9月2日、湯浅邦弘・竹田健二・福田一也・草野友子・中村(金城)未来が上海博物館を訪問し、上博楚簡の刊行状況や最新の研究動向について葛亮研究員と会談した。

平成26年9月3日、湯浅邦弘・竹田健二・福田一也・草野友子・中村(金城)未来が甘肅省文物考古研究所・甘肅簡牘博物館を訪問。孫占宇氏(蘭州城市学院)・楊眉氏(文物考古研究所の副研究員)・韓華氏(館員)の立ち会いのもと、「居延新簡」「敦煌馬圈湾簡」「敦煌懸泉置漢簡」「肩水金閼漢簡」「天水放馬灘秦簡」の実見調査を行った。またその後、館内三階の会議室に移動し、孫占宇氏・韓華氏・肖從礼氏(副研究員)・馬智全氏(副研究員)と研究施設や西北簡に関する会談を行った。

(中村 未来 記)

中国中世文学会

○平成26年度研究大会

11月8日 於広島大学文学研究科

- ・六朝期の「楽府」について 佐藤 大志
- ・北周の文人—庾信と王褒の文学— 木村 守
- ・宋代の雷説話の特徴について—洪邁『夷堅志』と『太平廣記』との比較を中心に— 本間 貴博
- ・杜甫「茅屋歌」「鳳凰台」に見える兼済意識について 中木 愛

- 『金瓶梅』の服飾描写 川島 優子
- 明治期日本における中国文言小説の受容をめぐる一六朝志怪、唐代伝奇を中心に一 高西 成介
- 『文選集注』卷九八の流伝について 神鷹 徳治
- [講演] 關於『杜甫集』的校注 謝 思焯

○例会 於広島大学文学研究科

4月24日

- 『琴趣外編』と諸家の詞集 渡部 雄之

○刊行物

『中国中世文学研究』第63・64合併号—森野繁夫博士追悼特集

(富永 一登 記)

広島大学中国文学研究室研究会

第181回 1月31日

(修士論文中間発表)

- 王羲之の評価の変遷について 志田 乙絵
- 欧陽脩『于役志』の特徴について 渡部 雄之

第182回 2月14日

(卒業論文最終発表会)

- 『水滸伝』から『金瓶梅』へ 大下祐紀子
- 『聊齋志異』に見られる蒲松齡の怪異観 岡本健太郎

第183回 6月30日

(修士論文最終発表)

- 「二拍」の執筆態度—『新編文類夷堅志』との比較を中心に— 徐 冬萍

(修士論文中間発表)

- 欧陽脩『帰田録』に見える批判的態度 渡部 雄之
- 遠山荷塘の交遊について—「荷塘道人圭公傳碑」を中心に— 樊 可人

第184回 7月25日

(修士論文中間発表)

- 王羲之の評価の変遷について—書体の問題について— 志田 乙絵

(卒業論文中間発表1)

- 容与堂百回本『水滸伝』における李卓吾批評の意義 橋本 夏樹
- 白話小説の中の数字について 吉野 茜

第185回 11月28日

- 容与堂本忠義水滸伝における李卓吾批評の意義について 橋本 夏樹

- 中国語の不定数「三五」「四五」の違いについて—『水滸伝』を中心として— 吉野 茜

第186回 12月20日

- 『諺解校注古本西廂記』の成立過程について—その本文を中心に— 樊 可人

- 六朝「舞詩」研究 胡 兮

○刊行物

『中国学研究論集』第32号(4月)

『中国学研究論集』第33号(12月)

(富永 一登 記)

広島大学中国思想文化学研究室研究会

第190回研究会 2月13日

[卒業論文発表会]

- 欧陽脩の「正統論」について 望月 勇希
- 江戸時代の儒学における職業倫理の特性—石田梅岩を中心として— 日下 理

[修士論文発表会]

- 緯書成立の研究 藤田 衛
- 中国古代書論研究—隸書という呼称を中心に— 高田 哲治

第191回研究会 11月13日

[卒業論文中間発表会]

- 西晉一郎「國體」論の基礎的研究—「忠孝」思想に着目して— 周藤 忠明
- 古代中国における追難とその変遷 藤村 知代

[修士論文中間発表会]

- 荘子の思想について—「一」の思想から— 秋葉不比等

第193回研究会 11月20日

[卒業論文テーマ発表会]

- 中国神話における二人の羿についての考察

有川久美子

- 新末後漢初に見える符命、図讖の利用 笹山 陽右

- 『論衡』における「天」と後漢の「天」 槇野晃太郎

- 『十一家注孫子』の各注釈の位相 森 泰平

○刊行物(発行人 東洋古典學研究會)

『東洋古典學研究』第37集(5月)

『東洋古典學研究』第38集(10月)

(有馬 卓也 記)

山口中国学会大会

◎例会

日時：2014年7月5日(土)午後1時半～

場所：山口大学人文学部2号館第5講義室

[研究発表]

- ・中島敦『わが西遊記』論—悟浄像の誕生 郭 玲玲

◎大会

日時：2014年12月13日(土)午後1時半～

場所：山口大学人文学部2号館第5講義室

[研究発表]

- ・清代『琵琶記』脚本の変遷
山口大学大学院東アジア研究科 張 洋

- ・西島良爾と中国語教科書
山口大学大学院東アジア研究科 王 雪

- ・梁啓超研究について
山口大学大学院東アジア研究科 于 海英

[講演]

- ・説唱宣講の全国各地への伝播
山口大学人文学部 阿部 泰記
(根ヶ山 徹 記)

第60回中国四国地区中国学会大会

平成26年6月14日(土)

島根大学 会場：島根大学松江キャンパス 法文学部棟2階多目的室1

○研究発表

- ・戦国後期の名実論 溝本 章治
- ・夔州時代の杜甫における華州
梅光学院大学 中尾健一郎

- ・明治初期の出雲漢詩壇 島根大学 要木 純一

- ・『宋詩話全編』の口語表現
鳥取大学名誉教授 塩見 邦彦
(内藤 忠和 記)

九州中国学会

平成26年度(第62回)九州中国学会大会

5月10, 11日 於久留米高専

5月10日

- ・佐藤直方の思想—正統論を中心として— 関 幹雄

- ・中国漢民族居住地における「新疆高校クラス」の実態
アイネル・バラティ

- ・生存圧力、家学伝統と移民環境—韓愈寓居宣城修業考論— 査 屏球

- ・久米村土族の漢籍学習について—楚南家文書を中心とする考察— 水上 雅晴

- ・(講演)久留米と梅林寺—地域へのかかわりと修業のしくみ— 牛尾 弘孝

5月11日

- ・「斉都賦」から見た左思「三都賦」の構想 栗山 雅央

- ・羿の性格とその伝承について 雁木 誠

- ・北魏の保太后—その「母子」関係と政治的位相— 稲田 友音

- ・漢武帝の「尊儒」についての再検討 何 俊

- ・成玄英『道德経開題序訣義疏』と李荣『道德真経注』との比較 李 劍楠

- ・中国である時期に行われていた挨拶の仕方について 西山 猛

- ・濱一衛の見た一九三〇年代中国演劇—上演史研究の一次資料— 中里見 敬

- ・方苞の経学について 木本 拓哉

- ・恵文太子考 劉 潔

- ・元稹「会真詩三十韻」から見た「鶯鶯伝」の構造 長谷川真史

- ・王龍溪の「頓悟」「漸修」についての考察 伊香賀 隆

○刊行物

『九州中国学会報』第52巻(2014年5月)

(中里見 敬 記)

九州大学中国文学会

○中国文藝座談会

第271回 2月1日

- ・目加田誠先生『北平日記』について 静永 健

- ・明末清初における牡丹亭還魂記の改編 根ヶ山 徹

- ・康熙刊『聖蹟全図』と道光刊『聖蹟図』 竹村 則行

第272回 3月1日

- ・明治期の八女の漢学者樋口和堂とその漢籍について 浦志優理子

- ・魯迅と欧米文学—『域外小説集』を中心として— 清水 駿貴

- ・蘇軾における「幽人」 黄 小珠



- ・ 仏典音義における唐代字様の利用について
賈 智
- 第273回 4月19日
 - ・ 羿の伝承における性格の不一致について 雁木 誠
 - ・ 恵文太子と玄宗時代の文壇について 劉 潔
 - ・ 左思「斉都賦」の復原に対する再検討 栗山 雅央
 - ・ 元稹「会真詩三十韻」の表現意図について 長谷川真史
- 第274回 7月5日
 - ・ 『源氏物語』から『狭衣物語』へ—漢詩文受容を中心として
閻 紹婕
 - ・ 宋代文人焚詩焚文考 李 祥
 - ・ 李雲翔編著活動考 岩崎華奈子
 - ・ 白楽天「江南遇天宝楽叟」は何時詠まれたか
静永 健
- 第275回 9月20日
 - ・ 羿を中心とする古代英雄故事の変遷 雁木 誠
 - ・ 唐皇族李範の文学活動とその作品の日本伝来について
劉 潔
 - ・ 『夷堅志乙志』の原本について—洪邁の改作経緯に着目して—
潘 超
- 第276回 11月15日 第2回宋代文学研究国際シンポジウムと共催
【第1部】第2回宋代文学研究国際シンポジウム—宋人文集の形成と伝承—
 - ・ 宋姚鉉『文粹』編纂、刊行及流行考論 查 屏球
 - ・ 書簡より見た周必大の『歐陽文忠公集』編纂について
東 英寿
 - ・ 『草堂詩余』在明代的演化与定位 鄧 子勉
 - ・ 唐宋碑誌集本与石本对比研究 胡 可先
- 【第2部】
 - ・ 明・張楷「蒲東崔張珠玉詩集」にみる『西廂記』の演变
竹村 則行
- 第277回 12月20日
 - ・ 柳永の艶詞について 丸尾 行雅
 - ・ 小説の中の趙雲 渡辺 亜子
 - ・ パール・S・バックとノーベル賞 波留 岳人
 - ・ 元代選集所収の陸游詩について 甲斐 雄一
- 刊行物
『中国文学論集』第43号 竹村則行教授退職記念号(12月)
(奥野新太郎 記)

❖ 平成27・28年度各種委員会の構成

◎：委員長 ○：副委員長 ◆：幹事

大会委員会

- ◎ 赤井 益久
- 佐竹 保子
- 坂井多穂子
- 谷口 洋
- 東 英寿
- 三上 英司
- 諸田 龍美
- 弐 和順
- ◆ 鈴木 崇義

論文審査委員会

- ◎ 大木 康
- 渡邊 義浩
- 浅見 洋二
- 井川 義次
- 市來津由彦
- 伊東 貴之
- 大西 克也
- 岡崎 由美
- 木津 祐子
- 小松 謙
- 近藤 浩之
- 白水 紀子
- 中島 隆博
- 野間 文史
- 町 泉寿郎
- 柳川 順子
- 横手 裕
- ◆ 関 俊史

出版委員会

- ◎ 釜谷 武志
- 静永 健
- 上田 望
- 松江 崇
- 南澤 良彦
- 森賀 一恵

湯浅 邦弘

◆ 佐藤 浩一

選挙管理委員会

- ◎ 松原 朗
- 河野貴美子
- 恩田 裕正
- 種村 和史
- 陳 捷
- 吉田 篤志
- 鷲野 正明
- ◆ 松野 敏之

研究推進・国際交流委員会

- ◎ 藤井 省三
- 宇佐美文理
- 吾妻 重二
- 玄 幸子
- 松村 茂樹
- ◆ 王 俊文

広報委員会

- ◎ 垣内 景子
- 二階堂善弘
- 梅川 純代
- 辛 賢
- 仙石 知子
- ◆ 高橋 康浩

将来計画特別委員会

- ◎ 佐藤鍊太郎
- 神塚 淑子
- 大形 徹
- 佐藤 正光
- 長尾 直茂
- 町 泉寿郎
- 三浦 秀一
- 緑川 英樹
- 横手 裕
- ◆ 松崎 哲之



❖ 委員会報告

論文審査委員会

委員長 富永 一登

○学会報第67集応募論文の審査の経緯

2015年1月20日締め切りの応募論文は全35編(哲学・思想部門10編、文学・語学部門22編、日本漢学部門3編)であった。1月31日に論文審査委員会を開催し、論文1編につき3名の査読委員(論文審査委員会委員1名を含む)を決め、査読委員となった論文審査委員会委員が閲読委員を兼ねることとした。依頼論文2編の閲読委員も決定した。

3月28日開催の論文審査委員会で、査読委員3名の査読結果をもとに、哲学・思想部門5編、文学・語学部門8編、日本漢学部門1編の計14編の掲載を決めた。

○その他、3月28日の論文審査委員会での審議決定事項

- ・学会報第68集依頼論文執筆候補者2名を決定し、理事会に推薦することとした。
- ・文学語学部門から1名の学会賞候補者を決定し、理事会に推薦することとした。あわせて、受賞理由執筆者を決めた。
- ・平成27年度日本学術振興会奨励賞推薦者については見送ることとし、理事会に報告することとした。

○以下の3点を次期委員会への申し送り事項とした。

- ・学会賞選定内規の見直し
- ・日本学術振興会奨励賞推薦者の決定時期の見直し
- ・論文執筆要領の見直し

❖ 事務局より

◎住所変更と名簿への掲載について

住所・所属機関等の変更は、速やかに事務局までご通知ください。通知は、メール・書面もしくはファックス、振替用紙通信欄にてお願いします。

10月発行の会員名簿には、8月末までにお知らせいただいた会員情報を掲載させていただきます。それ以降の変更については次年度の掲載となりますので、ご了承ください。

なお、従来、「会員名簿」には固定電話番号(自宅または勤務先)のみを掲載しておりましたが、2013年度から携帯電話番号も掲載できることといたしました。携帯番号を名簿に掲載することを希望される場合は、事務局までご一報願います(ご本人からのお申し出がない限り、既にご登録いただいている携帯番号を名簿に掲載することはありません)。

訃報

昨年度『学会便り』第2号発行以降、以下の方のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

(敬称略)

岡村 繁 (九州地区) 2014年12月26日

第67回大会開催のお知らせと研究発表の募集

会員各位

陽春の候、会員各位におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、日本中国学会第67回大会は國學院大學が準備を担当し、本年10月10日(土)、11(日)の両日に國學院大學(渋谷キャンパス)にて開催することになりました。

つきましては、下記の要領で研究発表を募集いたしますので、奮ってご応募くださいますようお願い申し上げます。

2015年4月吉日

日本中国学会第67回大会準備会代表

赤井 益久

記

1. 部会 : 一、哲学・思想
二、文学・語学
三、日本漢文(日本漢学・日本漢詩文・漢文教育など)
2. 時間 : 発表 20分 質疑応答 10分
3. 締め切り : 6月30日(火)(当日消印有効)
4. 応募 : 研究発表は、学術研究の最新の成果で、未公開のものに限ります。応募される方は、氏名(フリガナ・所属)・希望発表部会・連絡先メールアドレスを明記の上、発表題目および概要(800字以内)を、期日までに応募宛先まで郵送してください。なお、発表題目および概要については、その電子ファイルをEメール(データ添付)により期日までに送付してください。
※執筆者による校正はありませんので、完全原稿をお願いします。
5. 郵送宛先 : 〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28
國學院大學文学部中国文学科
日本中国学会第67回大会準備会代表 赤井 益久 宛
E-mail: akaimas@kokugakuin.ac.jp

◎本年は、一、哲学・思想 二、文学・語学 三、日本漢文の三部会を予定しておりますが、応募状況によって調整することも考えております。また、応募者多数の場合は、やむを得ずご発表をお断りすることもございますので、ご了承ください。

◎大会委員会では、託児に関して会員各位にご協力いただいたアンケート結果をもとに、検討を重ねて参りました。その結果、今大会では託児室を試験的に設置する運びとなりました。詳細につきましては、大会要項および学会HPにて告知する予定です。

【問合せ先】 担当：佐川 繭子(國學院大學教育開発推進機構)
E-mail: sagawama@kokugakuin.ac.jp TEL: 03-5466-6744